

# ペシャワール会報

No.28



## \*1990年度現地活動報告

- 氷河の流れのように・1990年度を振り返って ..... 中村 哲
- 1990年度ペシャワール会事業報告 ..... ペシャワール会事務局
- JAMS スタッフ紹介(1) ..... ペシャワール会事務局
- ジハド あるゲリラ兵士の変貌 ..... 中村哲
- 周囲とのバランスこそ重要と痛感して ..... 吉武英子
- 一緒に考えながら仕事をしています ..... 藤田千代子
- 短期ボランティア滞在記 ..... 前田裕之・宮本和子・伊藤みりえ
- 〔神と泥と人と〕音楽家達 ..... 甲斐大策

表紙絵 甲斐大策

ペ  
シャ  
ワール  
会  
一  
丁  
目  
一  
〇  
一  
二  
五  
上  
村  
第  
二  
ビ  
ル  
三  
〇  
七  
号  
福  
岡  
市  
中  
央  
区  
大  
名  
電  
話  
・  
F  
A  
X  
〇  
九  
二  
（  
七  
三  
二  
）  
二  
三  
七  
二

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

# 氷河の流れのように

## 1990年度を振り返って

我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち砕き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている。

中村 哲

### 国連幻想の崩壊

1990年度は、大きな飛躍の年であったといえる。一方では現地活動が着実な拡大をすると共に、他方日本側からの人的・物的補給も増大してきた。これは一重にJAMS現地スタッフや、日本人ワーカーの献身的な活動と共に、ペシャワール会の国内活動によって心ある人々の良心の輪が着実に拡大してきたからである。

現地ペシャワールでは、うんざりするほど多くの欧米援助団体、うんざりするほど華やかな紙上のプロジェクトが、次々と現れては消えていった。我々のような小さな者から見れば雲の上にあるような大きな組織が、卓抜な論理と豊富な財政で何事かを實現させるような幻覚を与えたが、肝心の難民には殆ど何事も起きなかった。札束が舞い、多くのビジネスと「繁栄」がペシャワールにもたらされた。押し寄せる外国人のために家賃が高騰し、アフガニスタンの内戦は収まらず、基本物価の上昇は現地庶民を苦しめた。

湾岸戦争で「難民帰還プロジェクト」は化けの皮を剥がされて、人々の前にあらわ

な姿をさらした。追い詰められた時にこそ、その本性が明らかになるといえるのは事実である。国際組織たるものが誇り高いUN(国連)のマークを慌てて消すなど、笑えぬこともあった。「アジア系の人を残留部隊にして」自分たちが我先に逃げる計画も普通であった。その狼狽ぶりは皆を落胆させた。「イスラム教徒のメンタリテイを疑う」人々が、あっさりとして現地を見捨てて去って行く。巧みな論理で組まれたプロジェクトは、巧みな器用さで総括されて閉じられてゆく。愚鈍な我々にそのような器用さはなく、地面に張り付いて下から眺めていた我々にとつて、この光景は一つの滑稽なカリカチュアである。格調高いヒューマニズムも、援助哲学も、美しい業績報告と共に、ついにガラスの陳列棚から躍り出ることはなかった。心ある人々は沈黙していた。

我々JAMSは、あたかも何事もなかったかの如く、黙々と活動を続けている。我々にはもはや、国連や欧米NGOの薄情さに怒りや批判を向けることはないだろう。事実がそれを語ってくれるし、それどころではないからである。JAMSは一步一步、現地に固く足を踏みしめながら目標に向け

て着実に進んでいる。

## 表層の喧騒とは無縁に

我々の歩みは牛のようにのろい。牛どころか、ある訪問者の述べたように、「まるで氷河の流れの如く」である。毎年、年報を出したり報告会を催すたびに、日本側ではどうしても代わり映えのしないものと思われる。

目まぐるしい日本の社会からすれば、確かにその通りだろうと私も思っている。ペシャワールにおいても、旅行者の目には、以前には考えられなかった交通混雑、新しい建築物、人々の服装の変化、テレビなどのマスメディアの普及などが、急速な近代化と映るに違いない。

しかし、それはこの社会の、ほんの表層の部分的変化に過ぎない。農村や下町に行けば、そこには殆ど昔と変わらぬ人々の生活がある。そして我々の活動も、これらの人々の涙や笑いと共にある。何世紀も営まれてきた人々の暮らしが、たかだか10年やそこらの紙上のプロジェクトで変わるものではない。しかも、俗にいう「進歩」や「発展」が本当にこの人々の幸せにつなが

るかどうか、私は疑問に思っている。

我々の歩みが人々と共にある「氷河の流れ」であることを、あえて願うものである。その歩みは静止しているかの如くのろいが、満身に氷雪を蓄え固めて、巨大な山々を確実に削り降ろしてゆく膨大なエネルギーの塊である。我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち碎き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている。

## 無数の見えない協力の集積

実際、我々の活動は、現地・日本を問わず、実に多くの人々の良心的協力と信頼で成り立っている。報告書では一行で済まされるが、一人のワーカーを送り出すにも、一つの機材を輸送するにしても、一つの技術が根づくのにも、一つの診療所を開設するのにも、そこには無数の見えない協力の集積がある。そして少なくともその協力は、決して現地の人々を裏切ることにはなかった。現地スタッフの中には不幸にして殉職した者さえある。任務の途中、戦地の砂漠の中で倒れかけていた老人を救出し、自分は

精根つきはてて倒れた仲間である。彼はJAMSの相互扶助の精神を愚直なまでに信じきって逝った。人命の犠牲を決して美化するものではないが、この愚直さを私は笑わない。JAMSの事業は、ライフルを捨てて故郷の再建に身を投じた彼にとつて、平和のジハード（聖戦）であった。現地側が命さえ投げ出す献身的な誠意を以て応ずる以上、我々もまた、それに値する十分な誠意と協力で報いるだろう。

この激動する世界の中で、我々JAMS II ペシャワール会の働きが、ささやかなりとも人間の奥にひそむ確かな何ものかに根づいているとすれば、今後とも変わらぬ戦乱や迫害に疲れた人々に慰めを与え続けるだろう。そして、我々自身もそれによって慰めを得、忘れてはならぬ何か気づくことが出来るに違いない。

1991年度も、我々一人一人の事業として、日本の良心を体現し、現地と更に力を合わせて活動を継続してゆきたい。

1991年4月1日

# 1991年度事業計画

1991年度も、アフガニスタン無医村診療態勢確立による復興支援

パキスタン北西辺境州・アフガニスタンのらい根絶計画支援

以上の大目標に変更はあり得ない。診療所機能も当然、改善が続けられ、日本との人的交流もさらに拡大する見通しである。ただ大きな年度目標事業としては、以下の計画を立てている。

## アフガニスタン国内診療所の設置

1991年は、国連や西欧NGO諸団体の撤退が本格化し、アフガニスタン国内の安定が現実化し始めるとJAMSは分析している。国内活動を開始する好機で、JAMSとしては以下のプランに従って基地診

療所をおく。

①目的…山岳部無医地区(「らい多発地区でもある」)における医療体制のあるべき姿を探り、あわせて同地区南部の、戦火で荒廃した農村の住民(「難民」)が帰還しやすい条件を作る。

②時期…1991年8月までに人員配備と輸送態勢を整え、1991年11月中旬に準備を完了、同年12月1日にオープンする。

③活動地…アフガニスタン・ニングラハル州北西部のドラエ・ヌール渓谷上流。約20ヶ村、一〇〇〇〇—一五〇〇〇家族(推定人口10万人以上)の居住する高地山岳部。民族的にはパシュトゥン族とヌーリスタン族(亜種)が混居する。距離はベシャワールからジープと徒歩で3日以内(政情不安定地区の通過で補給が困難な場合、パクテイカに置く)。

④活動内容…第一段階で小さな診療活動を行いつつ状況を調査(疫学調査など)、保健・母子衛生を含む将来の本格的な活動に備える。重症者はベシャワールの中央診療所に送る。

⑤人員…医師1、検査技師1、看護士・助手2、門衛・伝令2、運転手1、総計7



名のアフガン人チームとし、ベシャワールの本部から交代制で配備する。

## 熱帯医学・小訓練コース

①目的…将来の復興に備え、若い医療関係者(主に医師)に土地にあった疾病の診断・治療、予防、環境衛生などを教育する人材作りである。最近では先進国に追いつこうとする余り、ベシャワールでさえも検査依存の体質、金のかかる医療、一般庶民に



は縁のない医療教育が行われる傾向がある。先端技術に憧れる若い優秀な頭脳が現地から流出するのを防止し、適切な治療行為を流布する。同時に、日本人医師・看護婦なども募集し、日本側の人材作りに協力する。

②期間…1991年5月より準備を始め、1992年2月より実施する。第1期は3カ月間。募集・卒業共に試験を行い、第1期は20名を予定。但し、正確な時期は、準備が整った段階で調整する。

③教育内容と対象者…若い卒業後のアフガン人医師で、将来アフガニスタンに止まって医療活動を志す者が主たる対象。欧米諸国に逃れようとする者は問題にならない。日本人医師の場合は、卒業後1年以上の臨床経験者で、英語を解する者とする。

研修内容は、北西辺境州とアフガニスタンに多発する感染症の診断と治療（マラリア、リーシュマニア、アメーバ症、らい・結核病とそのコントロール、下痢症の臨床、中央アジアに多い先天性血液疾患、貧血症、栄養障害、その他の寄生虫を含む感染症すべて）予防、母子衛生、土地の事情に適した治療法などが主なテーマである。

卒業者には証書を発行する。証書自体は日本人医師に特別メリットがないが、感染症の臨床に興味がある者、発展途上国の医療に興味がある者には十分役立つものと確信する。実際の医療現場で、最低限の装備を以て最大限のものをいかに發揮するか、よい訓練になるだろう。

④予算…日本からの講師2名、現地講師4名の4カ月分給与と教材が主で、後の準備はJAMS事務局で可能。ある程度の実習は現在のJAMS診療所を利用できる。

問題は教育スタッフの人材さがし。日本の医療機関と協力し、英国などからの講師招聘も考慮している。現在立案中。

### ホームレスのらる患者の世話

(自定着村)

前年度の企画書を参照。1991年度は辛抱強く調査を重ね、予算の蓄積するのを待つがよからうと思われる。難民にかかわる政情も大きく変わりつつあるので、しばらくは安定を待ち、1991年度には大きな投資をしない。

\*現地の活動が拡充するにつれ、報告書も年々大部になって来ました。

今年から、会報には報告書のエッセンスだけを掲載することにしましたので、全文をお読みにになりたい方は、ご連絡下さい。事務局より「一九九〇年度事業報告——沿革と現況」(二〇頁)をお送りいたします。

## 1990年度までの主なボランティア（現地協力者）

名 前	職 種	所 属	期 間
熊野 公子	医師	神戸成人病センター	①1986年12月-1987年1月 ②1989年12月-1990年1月
松本 繁	検査技師	国立邑久光明園	①1986年12月-1987年1月 ②1987年2月-1987年3月 ③1989年12月-1990年1月
宮原 昇	検査技師	若松臨床検査技師会	1987年3月-1987年4月
福島 裕助	農業技師	福岡県職員	1988年1月-1988年3月
佐藤 雄二	医師	国立肥前療養所	1988年4月（1週間）
★安部美智子	看護婦	原病院勤務（福岡）	1988年10月-1989年5月
松尾 栄樹	検査技師	福岡済生会病院	1988年10月-1988年11月
喜多 悦子	医師	ユニセフ・ペシャワール事務所	1988年10月-1990年10月
鎌田 啓介	医学生	東北大学医学部	1989年1月-1989年8月
Dr. G. Warren	医師	Leprosy Mission	1989年1月-1989年2月
★石松 義弘	医師	天心堂へつぎ病院（大分）	1989年4月-1991年3月
右田 徹雄	自由業	熊本ペシャワール会	1989年4月-1989年7月
山口 誠史	事務業	日本ボランティアセンター	1989年7月-1989年8月
中田 正一	農業技術	「風の学校」主宰	1989年7月-1989年8月
蔵所麻里子	作業療法士	八尾徳洲会病院	1989年11月-1989年12月
★沢田 裕子	事務・通訳	福岡市役所	1989年11月-1990年6月
吉富 雅子	X線技師	元病院勤務（大分）	1990年5月-1990年6月
★藤田千代子	看護婦	福岡徳洲会病院	1990年9月-現在（2年派遣）
★吉武 英子	医師	札幌里塚病院	1990年10月-現在（2年派遣）
岩本 直美	看護婦	（英国留学中）	1990年11月-1991年1月
西岡 和子	英語講師		1991年2月-1991年3月
伊藤みりえ	医学生	千葉大学医学部	1991年3月（2週間）
宮本 和子	検査技師	千葉大学看護学部	1991年3月-1991年4月（約1カ月）

（★=ペシャワール会を通して派遣された6カ月以上の長期赴任者）



〔1990年度ベシヤワール会事業報告〕

皆さま方のご支援により、現地を含む会の活動は一段と拡充いたしました。具体的な活動については中村先生の報告にゆずりますが、会員・会費・寄付等の増加について昨年との比較で報告します。会費及び寄付が昨年より約三六〇万円増(二二%増)しました。内個人が六八五件↓一〇九七件(一六〇%増)、団体が五五件↓九一件(六五%増)と大きく増加しています。マスコミのレベルでは、ア

フガン難民はすでに過去の忘れ去られた存在ですが、もつと深い処で会の活動が人々の共感を得ているのだと思います。JAMSへの顕微鏡寄付の呼びかけにもたくさんの方の寄贈がありました。ワーカーの希望者も着実に増えています。一歩一歩の歩みのために、皆さま方の持続的なご支援をお願いいたします。ありがとうございます。

●一九九〇年度中に寄附をお寄せいただいた団体  
(一九九〇年四月～一九九一年三月)

- 板付北小学校六年二組
- 西南学院
- 西南幼稚園
- 西南学院中学校
- 西南学院高等学校
- 添田中学校一年三組
- 檜原こひつじ幼稚園
- 福岡女学院中学校
- 福岡女学院高等学校
- 福岡女学院短期大学
- 西南女子短期大学
- 九州学生YMCA
- 越洋会
- コスモス会
- アフガン難民に医薬品を送る会
- アジアを考える会北九州
- うら梅の郷会
- 山鹿市石松君同級生一同
- 人間いきいき研究会
- コスモス岳友会
- 国際医療学会
- 八尾徳洲会病院
- 長崎北徳洲会病院
- 青洲会病院
- 札幌里塚病院
- 油山病院
- 新栄病院
- 浅木病院
- 馬場病院
- 朝倉記念病院
- 菊池養生園
- 医食農セミナー
- 老人保健施設城山荘
- 国際ソロプチミスト北九州西
- 福岡黒田ライオンズクラブ
- 国際ソロプチミスト日田
- 福岡鶴城ライオンズクラブ
- 国際ソロプチミスト福岡南
- 福岡西ロータリークラブ
- 福岡西ロータリークラブ
- 福岡ロータリークラブ
- 福岡ロータリークラブ
- 福岡西ロータリークラブ
- 筑前ライオンズクラブ
- 古賀町役場
- 田隈バプテスト教会
- 香住ヶ丘バプテスト教会
- 西南学院バプテスト教会
- 天神聖書集会
- 日本聖公会福岡教会
- 日本キリスト教団福岡南教会
- 鳥栖バプテストキリスト教会婦人部
- 福岡ベタニア村教会
- 大名町カトリック教会
- 福岡キリスト教女性青年会
- 福岡聖書研究会
- 大牟田正山町教会学校
- 平尾バプテスト教会
- シオン山教会
- 岡山リハビリ
- 日本バキスタン協会
- 山鹿青年商工会議所

ベシヤワール会1990年度会計報告

〔収入の部〕

1. 会費及び寄付(1)	16,148,084
2. 事業収入 (2)	848,755
3. 利息雑収入	39,317
計	17,036,156
前年度繰越	920,986
合計	17,957,142

〔支出の部〕

1. 現地支援費 (3)	9,911,488
2. 渡航及び通信費(4)	1,095,286
3. 国内活動費	1,727,767
4. 事業費(会報発行・発送)	1,904,549
5. 事務局費(家賃・事務用品)	1,603,738
計	16,242,828
次年度繰越	1,714,314
合計	17,957,142

ベシヤワール会1990年度特別会計

〔収入の部〕

1. 外務省 NGO 補助金(5)	7,000,000
計	7,000,000

〔支出の部〕

1. JAMS 人件費	4,998,000
2. 医薬品費	2,002,000
計	7,000,000

- (1)個人1,097件、団体91件
- (2)本及びカーペット販売等
- (3)国内及び現地で購入した医薬品・医療機器・JAMS 運営費
- (4)3ヶ月以上の長期ボランティア及びその家族へ支給
- (5)ベシヤワール会を通じて JAMS になされた補助

# 眞の夢を 療にかけて

## スタッフ紹介(1)



ドクター・シャワリ (JAMS 院長)

シャワリ先生をこれだけの字数で表現するのは難しい。祖国を愛し、憂い、JAMSのみならず一族の長としての重責は、はたで見ても気が遠くなりそうだった。けれど、いつもユーモアを忘れず、細かい洞察力でJAMSを統率していた。

ナジブ (検査技師)

カーブル出身。ソ連軍のアフガニスタン侵攻時には法学生だった。JAMSに勤め始めて5年になる。検査技師、シャワリ先生の右腕として、JAMSの重要なスタッフ。昨年結婚した。ユーモア溢れ、心優しい、いつも笑顔の彼であったが、アフガンの事態が動揺すると、いつも暗い悲しい表情を浮かべていた



婚約披露宴のナジブと  
婚約者

レントゲン技師のマエダ・ヒロユキさん  
(日本人のワーカーです。念のため)



### アサド (X線技師)

カーブル出身の19歳。スポーツが得意で今もベジャワールでカラテを習っている。X線技師に選ばれた時は「大丈夫だろうか」とずっと不安そうにしていたが、今では十分立派な写真が撮れるようになった。断食中、大きな体で意気消沈していた姿が思い出される



### アベド (看護師)

パンジシェル出身。非常に有能な看護師で、アフガニスタン内部の戦闘でも看護師をしていた。手術中はドクターの欠かせないパートナー。平常は物腰柔らかい、優しい人である



安部看護婦と傷の手当をするアベド

# アフガン復 医

JAMSでは現在37人のアフガン人スタッフが働いています。  
今号から3回に分けて紹介します。

## JAMSスタ





JAMS 検査室風景

ハンジャン (ドライバー)  
主に中村先生のドライバーとして勤務。パジェロをいつも子供のように可愛がり、とても大切にしている。にこにこ穏やかな人柄だが、雑談になるといつもベシャワールは暑くていやだ、早くアフガニスタンに帰りたい、と呟っていた



パジェロと共に (ハンジャン：右端)



JAMS の表玄関。左はJAMS のトレードマーク



モハマッド・クル (コック)

勤勉で知られるマザジェリフ出身のトルクメン。日本人以上に細やかな心遣いで、料理・掃除など一切をこなし、大勢の来客の時も同様であった。娘を初め、家族はまだ皆アフガニスタンに残っている。昨年、もうすぐ再婚するのだと皆に冷やかされていた



アブドウラ・ガフル（検査技師見習い）  
 バルワン出身の23歳。JAMSの検査室  
 を手伝いながら研修と勉強を続けてい  
 る。無口で人見知りすることもあるが、  
 笑った時にパッとのおぞく無邪気な表情  
 が印象的だった



## 〔JAMS診療報告〕 (1991年1月1日～2月28日)

### ◎フィールドワーク

訪問難民キャンプ 13ヶ所  
 診療数 のべ 503名

### ◎検査

血液検査 980件  
 化学反応検査 267ヶ  
 らい菌検査 80ヶ  
 尿検査 967ヶ  
 便検査 1,071ヶ  
 ツベルクリン検査 34ヶ  
 心電図 64ヶ  
 X線 361ヶ

### ◎ベシャワール診療所

外来患者数 のべ 3,383名  
 入院患者数 78ヶ  
 退院患者数 79ヶ

### ◎テメルガール診療所

外来患者数 のべ 1,772名  
 マラリア検査陽性 153件  
 血液検査 415ヶ  
 尿検査 449ヶ  
 便検査 458ヶ  
 ライ菌検査 108ヶ



荒寥と広がるアコラハタック  
 の難民キャンプ

トルクメンのカーペット・ワークショップのふたり。1  
 日に何センチという作業を黙々と続ける。糸を切るナイ  
 フのシャッシャッという音が静寂の中に快く響く



### モハマッド・モルタザン（靴職人）

マリ出身のサンダルワークショップの職人さん。非常に腕の良い人で、  
 サンダルのみでなく立派な靴も製作することができる。あまり腕が良  
 過ぎて彼を手放した靴屋の主人からクレームが付きそうになったほど

# ジハド

あるゲリラ兵士の変貌

JAMS(ジャパン・アフガン医療サービス顧問医師)

ペシヤワールミッション病院医師  
中村 哲

## ムーサーの過去

ムーサーはJAMS(日本アフガン医療サービス)の古参スタッフの一人である。クナールのイスラム指導者の由緒ある家系に生まれた。小さいときから一本気で、その上典型的なペシユトゥン氣質かちときているから始末が悪い。誇りと勝ち気と真っ正直さは時に手に負えないこともある。

よく一緒に出掛けるが、ムーサーの運転は荒い。パキスタンの警察の検問などおまいもなく突破する。「馬鹿野郎。目はついとるのか。公用だ!」という気迫と獐犷ぢやうぼうさに押されていたいのものは逆わない。事務所としても、厄介であると同時に重宝な存在である。イスラム教徒の習慣と節を守り抜く、私の知る限りで最も一途で実直なペシユトゥンであった。

ムーサーは自分の経歴を人に話したがらなかった。言われぬ苦労と体験があったのだろう。多くの殺戮さつりくと死を見てきた者に特別な暗さが表情に現れていた。ゲリラ仲間たちにさえ恐れられる歴戦のつわものであったことは知られている。だがそのムーサーが、ある日突然前線を去った理由を知る者は少ない。

## 若いゲリラ戦闘員

ある時、私は彼の故郷の戦場の近くのバザールを通ったことがある。バザールといっても、戦場の廃墟に復活したばかりの貧弱なもので、戦火が収まって帰郷した難民の一部が細々と生活の営みを始めたところであった。

通りがかりに見ていると、若いゲリラ戦闘員がバザールで何かやり取りをしていた。

食事の代金を払わずに立ち去ろうとしている。ただで食わせてもらうのが当然とばかり、自分がまるで住民の守護神でもあるかのような傲慢な態度が看取れた。

突然ムーサーが足を止め、若者の襟首をつかんだ。

「おめえは本当にムジャヘディン(イスラム戦士)かい。誰のために戦つとるんだ。貧しい者からふんだくって、それでもムサルマン(回教徒)か」

意表をつかれた若者が向き直ると、ムーサーはライフルを構えて「代金を払え」と言った。

いくらこの世界でも、公衆の面前で他人に銃を向けることは滅多にあるものではない。それに、この若者の党派の仲間が大勢周囲にいた。彼は数を頼んでムーサーに食ってかかった。

「俺たちを誰だと思ってるんだ。ただでは済まんぞ」

ムーサーはそれを無視するように「払え」と怒鳴りつけ、若者の足元に向けて数回たて続けに発砲した。銃声と共に土煙りが彼の足元を覆った。そして、今度は水平にライフルを構え直し、「払わなければ、



食堂でくつろぐムーサー

おまえを殺す」と吠えるように言った。ムーサーの形相が変わっていた。本気だった。さすがに若者は仰天し、遠巻きに見ていた群衆もムーサーを支持したので身に危険を感じたらしく、金を払って立ち去った。一部始終を見聞きした我々は、ムーサーが戦線を離脱してペシャワールに来た理由をやつと理解した。

## 兵の私物化

一九七九年十二月、ソ連軍九万のアフガニスタン進攻によって内乱がいよいよ本格化した時、彼はイランに留学していた。

「革命政権」が農奴解放と称して彼の一族を襲い、父親を処刑したという報を聞くや、直ちに帰郷してゲリラに身を投じて戦った。彼が義勇兵としてムジャヘディン・ゲリラの一派派に投じて間もなく、このグループは匪賊化していったらしい。彼の属するコマンドーン(司令官)は、長い血なまぐさい闘争で哀みの情を麻痺させた。部隊を率いて戦った経歴が驕った態度を身につけさせ、兵を私物化させていった。

殉すべきジハド(聖戦)の理想と現実はいかに掛け離れていた。ムーサーは、このコマンドーンに敵意を抱くようになっていた。「政府協力者が金を出さぬ時は皆殺せ」との命令を受けた時、正義感から来る怒りは頂点に達した。

「彼らは罪のない貧しい地主と農民ではないか。我々の戦いは誰のために、何のためにあるのだ」

ムーサーがこのコマンドーンをどうした

か知る由もないが、ともかく彼は部隊を離れた。

「これは汚い戦いだ。政治党派にイスラムの大義などありはせぬ。パシトゥンの名にも値いせぬ。俺は腐った犬どもと死ぬものか」

ジハドの意味はこれによって彼の心中から消え去った。古き良きアフガニスタンも遙か彼方に崩れ去っていた。平和な故郷の田園は今も廃墟と化し、政府ソ連軍と自称ムジャヘディン・ゲリラのみ跋扈する殺伐とした光景を呈していた。悲憤がたぎるような復讐への思いとなつて彼を支配したが、それはもはやソ連兵でもカブール政権に対してでもなかった。故郷を荒らす外来者一切と、彼の信ずる無垢の「イスラム」を傷つける一切が敵であった。

## 我々のジハド

彼が私と出会ったのは、それから二年後の一九八六年のことであった。パシトゥン民族主義にある程度共感していた彼は、当時その傘下にあるペシャワールの病院に運転手として勤務していた。しかし、その首脳陣に対しても、彼は目ざとく例のコマ

ンダーンに似た驕りと腐敗を感じていた。

多くの難民救済団体の外国人たちも、彼らにとっては同様であった。彼らの多くがアフガニスタンの人々の為に熱意を傾けるよりは、自らの業績作りに忙しい。彼らはアフガニスタンもパキスタンも知らない。しかし自分は彼らに雇われることで生計を立てねばならない。弱い立場にあるものは人の誠意を敏感に嗅ぎ取るものである。「援助する者」の無知と驕りは耐え難い屈辱であった。

JAMSが結成された直後、我々の誘いに彼は二つ返事で応じた。

ジャーパン！それはおぼろげに想像するだけではあったが、一つの独特な響きを彼に与えた。アフガニスタンを切り刻んだロシア・米英と戦った東方の国。アフガニスタンと同じ手によって「ヒロシマ・ナガサキ」の惨禍を被った国。その漠然たる印象はこの戦乱の中でいよいよ輝いて親近感を覚えるのだった。

初めて間近に見る日本人はハザラ族やトルコマン族に似ていた。義兄弟のシャワリ医師が忠誠を置いているのを見て、不思議な人種だと思った。片言だがパシュトゥ語

を解するのが嬉しかった。

「アフガニスタンの再建こそ我々のジハド（聖戦）である。スピン・スパイ（＝白犬、欧米人をアフガン人は陰でそう呼ぶ）に荒らされた恨みを建設にふりむける。平和と建設を、戦争以上の努力で実行しよう」という、JAMSの方針がムーサーの心を捕らえていた。

「日本が何かできるのですか」

「日本が何かをするのではない。するのは君たちであり、我々だ。君が右手を捧げるなら私も右手を捧げよう」

「ドクター、これは汚い戦いです。私もゲリラとして戦いましたが、嫌気がさして逃げて来ました。もう沢山です。党派のいうことは嘘です」

「分かっている。だが、今は耐え抜いて人の良心の力を集めよう。ロシアも米国も必ず去る時が来るだろう」

「ロシアが去っても、この混乱をどう收拾しろというのですか。みなバラバラです」

「そんなことはない。バラバラなのは金と欲で頭のいかれた奴らだけだ。現に異教徒の私でさえ君たちの仲間ではないか。み

な争いに疲れている。金で集まる者は金が無くなると散ってゆく。銃で立つものは銃で倒される。我々をつなぐのはそんなものではない」

ムーサーはその通りだと思った。アフガニスタンはバラバラだ。しかし、ここにすることができる一つの希望がある。それが何なのかは、彼の頭脳の中で明瞭に描くのは困難だったが、確かな輝きのように思えた。

美しいヒンドウクツシユの山並みとクナールの故郷はペシャワールの喧噪と砂塵で隔てられている。だがそれが現実にかに荒廃していようと、彼の心の中では依然として緑あふれる帰るべきふるさとであった。



一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒業。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミッション・ホスピタルに赴任。らいを中心にしたアフガン難民の診療に携わると共にJAMS(ジャパン・アフガン・医療サービス)を設立、長期的展望に立ったアフガニスタンでの医療活動をめざして現在に至る。著書に『ペシャワールにて』(石風社)『ペシャワールからの報告』(河合文化研究所)がある。

## 周囲とのバランスこそ

### 重要と痛感して

ペシャワールミッション病院医師  
札幌聖隷病院医師

吉武英子

皆様、こんにちは。お元気ですか。

今日は実をいいますと札幌から書かせていただいています。少し早めに帰国し、約十日間が過ぎました。いつも時計をみている今ごろは皆で傷の手当てをしているころだな、皆でお茶をのんでいるころだな、藤田さんは昼寝をしているころかなetc. と思いで出しています。今年の夏は例年に比べおだやかだそうですが、きつと外は四〇℃前後だと思います。当地札幌ではせいぜい二〇℃ですが。

### 外国人は地味であれ

今回は中村先生から注意された点を中心にペシャワールの反省をしてみたいと思います。やはり海外医療となると、日本ではそれほど表面にでなかった欠点が大変重要な問題となりました。その一つを書いてみ

ますと、私たちがついやりすぎてしまい、地元のスタッフの仕事を奪いかねなかったということでした。以前から中村先生は常に「現地をたてよ。外国人は絶対に目立ってはだめだ。地味にせよ」と言われていました。これは鉄則であったのですが徐々にこれを犯していました。

### 手伝いが仕事を奪うことにも

日本人特有の一生懸命な気質、傷が治ってほしい、患者さんに親切にしてあげたいという気持ち、やっつてはいけないこと、手を出させてしまったのです。たとえばこのようなことです。朝のガーゼ交換は一日の最も大切な仕事の一つですが、ややもすると私たちだけがそれをして他のスタッフはのんびりとちがうことをするようになっていました。私が行った頃はどうかであつた



患者さんに傷の具合を尋ねる吉武医師

かはよく思い出すことができませんが、以前は皆でやっていたようです。このような私たちの行為は結局、彼らから仕事を奪ってしまうことだったのです。また「あそこは日本人が働いているところ」ということになり、ひいてはスタッフとのバランスをくずし、結局崩壊へとなることも否定はできなかつたのではないかと思います。このことを先生から強く指摘されたときは一生懸命にやっていたつもりなのですが否定されたようにショックでしたが、冷静に考えてみると当然のことですね。(十次頁下段)

# 一緒に考えながら 仕事をしています——らい病棟の仲間たち

ベシヤワール・ミッション病院看護婦  
福岡徳洲会病院看護婦

藤田千代子

## 皆で一斉に

お元気でございましょうか。

こちらはスタッフも私も、元気にしています。私が一番気にしていたドレッシング（傷のつけかえ）は、今も皆で一斉にやっています。シャキールなどが一つ一つの傷をよく見て適切に処置しているのを見ると、今までもつたないことをしたなあと反省しています。サダーカットも一生懸命やっています。

時々暑さのせいか怠惰になり、十時のお茶がいつまでも終わらなかつたりして、イヤだなあと思ったりもします。私もすぐ仲間入りしてしまうのですが、何日か続くとやっぱりこれではいけないと思って、だまってカルテに熱を記入したり、他のことをはじめます。すると、バツティやシャキール

ルかシャマウンが来て一緒に熱を記録したりし始めます。そんな時は一人でニンマリしてしまいます。以前先生が話して下さった「黙ってコツコツとやっていたら……」



スタッフ皆といっしょに

## バランスを欠いた医療の危険性

後日、あちらのスタッフを含めこれからの方針が示されました。その翌日からはスタッフ全員でガーゼ交換をしました。皆、生き生きと働くようになりました。きつと今も、そして藤田さんが帰国した後も続くことでしょう。中途半端なボランティア意識と周囲とのバランスを欠いた医療がいかに危険であるか、そして海外医療協力とはもつと厳しいものだということを痛感しました。このような先生の全体をよくみすえた上での断固とした考えと鋭い指摘こそが他の海外医療団体が次々とつぶれるなかで、らい医療をここまで発展させたのだと思います。

他にも反省することはたくさんあるのですが、今日はこの辺にしておきます。最後にこれからは十分に考え、少しでもよい医療ができるよう努力したいと思います。では皆様の御健康とお幸せを願っています。

北海道の春風の中で

吉武英子

「...」というのは、こんなことかなあと感じました。

一緒に考えながら一緒に仕事をするのが嬉しくて、こんな小さな出来事に喜んでいきます。

### 「絶対秘密だぞ」

ミスター・バッティは相変わらずてきぱきと仕事をやって、シャマウンやシャキールがもつと仕事をしてくれたりいとはやっています。そして私に、時たま果物をくれたり、小さな子供が食べるようなおかしをくれたりします。

ミスター・ピアラはスタッフに注意すると、自分の悪口をどこかで言っていると嘆いています。そして、「シスター、これは絶対秘密だぞ」と何度も念をおして、ポロポロと内緒事を話します。内容はほとんど絶対秘密というほどのことではないのですが、ミスター・シャリーフは二人になると、すぐバッティのことを話し始め



ペシャワール風物詩 サトウキビ売りのおじさん

ベットのオペ後のPOP（ギブス）をあける予定です。他の患者さんの傷も不思議と治ってきていて、サダーカットとacca acca（良かった良かった）と喜んでいきます。それではお元気でおすすめ下さい。（本文は中村先生への私信ですが、本人の了解を得て掲載しました）

ます。

### サンリも一匹

一人になって心細いなあと思っていた時に、宿舎に電話がついて嬉しいです。母と早速話をしました。ありがとうございます。私も相変わらずで、かべちよる（ヤモリ）や、台所で突然ゲロゲロと声を出すカエルにびっくりしながら、Guzara kar rahi (何とかやっています)。サンリも一匹いました。

最後になりましたが、中村先生と吉武英子先生のされたオペ（手術）後の患者さんは、経過良好です。六月一日にドロップ

### 花売り

ペシャワールの街角から①



いつも砂埃と車の排気ガスがかすむほどのペシャワールの街ですが、ちよつと大通りをはざると家々の庭先から柔かな花の香りが風につて来ます。写真の男の人が売っているスイセンは、ほんの短い間だけペシャワール近郊から街に運ばれ、とても良い香りを放っていました。郊外に出ると農村の男・子供たちが道端でスイセンの花束を両手一杯に抱え、通りすぎる車に売り声をあげる風景が見受けられます。

# 短期ボランティア滞在記

三月中旬から千葉大学看護学部の宮本和子さんが一ヶ月、同じく医学部の伊藤みりえさんが二週間、また四月からは熊本機能病院のレントゲン技師、前田裕之さんが一ヶ月半ほど、それぞれ短期ボランティアとして滞在されました。

## 小さな外交官として

熊本機能病院レントゲン技師

前田裕之

### \*朝からいびいた返す患者さん

事務局の皆様、そして会員の方々、いかがお過ごしでしょうか。ペシャワールにあるJAMSで約二ヶ月弱、放射線技師としてレントゲン関係の仕事をしてきました。今、ペシャワールで過ごした約二ヶ月を振り返ってみたいと思います。自分の一日は、朝早くから門で待っておられる患者さん達との会話が始まり、もう八時ごろには、

### \*現地の価値観を尊重しよう

沢山の患者でごった返しています。このような光景をみると、つくづく、JAMSがこの人々にとって非常に大きな存在であること、そして、私も仕事に対し責任を持たなければならぬと感じたものです。さらに、ドクターが診断しやすいようなレントゲン写真をつくらなければならない自分の立場というものを再確認しながら、アフガン人スタッフ二人と一緒に仕事をやりました。(日本人の持っている技術が唯一のものであるとする自惚れに気をつけながら。)

異なる文化、異なる環境の中で生活するには、ただ計算値を部分的に変えるだけではうまくいきません。それ故、彼らの価値観を尊重しながらも、如何に技術のレベルアップをするかを私の課題として仕事を続けたように思えます。医療スタッフと共に考え、議論することで良い写真ができた時は、彼らと共に喜び合いました。そんな時



一緒に仕事をした仲間と

は、内戦で苦しんでいる祖国を瞬間でも忘れているみたいで表情も晴れやかでした。ややもすると暗い表情になりがちな彼らも、いずれ内戦が終わり祖国へ戻る日には、病気で悩んでいる同胞達のために彼らの身につけた技術が役に立つことと信じます。

カラチより列車の旅で始まったこの二ヶ月間、砂漠(ムルターン)を通過、そしてインダス河を渡った時、このパキスタンという国の歴史を肌で感じ、ペシャワールに到着したら、アフガニスタンの文化にわずかばかりでしたが接する機会を得ました。短い期間でしたが、やはり参加して良かったと思います。何故なら、諦めてしまうには、余りにも地球は素晴らしすぎるからです。

では最後に、中村先生、シャワリ先生を

はじめスタッフ全員のご活躍を、お祈りいたします。

### 雨の日は「良い天気」

千葉大学看護学部学生

宮本和子

### \*美しい街ペシャワール

中村先生の「まあ気楽に、のんびりしに  
来たらどうですか」との言葉を信じ、念願  
のペシャワールに到着したのは三月十三日、  
定刻通り（これは奇蹟に近いという）十時  
三十分だった。「体型を隠す格好」と必  
死で考えた珍妙な出立の私たちをドクター  
・シャワリとミスター・ナジブが迎えてく  
れた。

昨夜の雨で洗われた街の明るさ。馬も驢  
馬も車も人も一緒に行き交う通り。緑の多  
い街並。ペシャワールは大会だった。赤  
茶けた砂漠の街をイメージしていた私はペ  
シャワールの美しさと活気に驚いた。

### \*断食に挑戦

吉武先生と藤田さんの暮らすミッション



ペシャワールの街は活気にあふれている

病院内の宿舎に居候し、ペシャワールでの  
生活が始まった。折しもラマザン（断食  
月）の開始。私と同行の伊藤さんもロジャ  
（断食）に挑戦した。が、空腹よりも喉の  
乾きと夜明け前の朝食のつらさに挫折して  
しまった。現地の人と少しでも近い体験を、  
と願ったのだが、私たちが断食してい  
ると知った時のJAMSのスタッフ達の不  
思議そうな顔やラマザンの意味の深さを  
思うと、一緒になりたい、同じようにした  
い、という思いの中に自分のエゴを見た気

がした。

### \*楽しかった検査室

私の日々は宿舎とJAMSの検査室を往  
復することにはほぼ終始した。検査室だけ  
一カ月を過ごすのは当初つらいことに思え  
た。しかし日がたてばたつほど私は検査室  
にいるのが楽しくなり、終わりの日が近づ  
くほど離れ難くなっていった。色々なこと  
が中途半端だったからでも、自分が何かや  
った満足があったからでもない。JAMS  
のスタッフ（特に検査室の）と過ごせば過  
ごすほど、彼らを好きになり、一緒に悩ん  
だり失敗したりしながら仕事を続けられた  
らと願うようになっていったからだと思う。  
いつかJAMSに押しかけ女房してしま  
うのでは……（その時は追い返さないで下  
さいね）。

### \*雨の日は「良い天気」

私が訪れた三月〜四月はバラの花が満開  
でとても美しい、暑くも寒くもないよい季  
節であった。芝生の庭はいかにも昼寝に好  
ましく見えた。バザールは様々な野菜、果  
物、お菓子などで賑わい、ついつい遠出へ



JAMS スタッフと(左手前が宮本さん)

といざなわれた。私のようなおてんばにはイスラム社会の女性を隠す習慣は好ましくなかったし、実際気をつかうことも多かった。しかし考えてみれば異文化の中、私の習慣、考え方が通じないのも当然である。この社会では「良いお天気ですね」とあいさつするのは雨や曇りの日なのである(晴天は暑い、ほこりっぽい。ちっとも良いお天気ではない)。違うのは当然なのだ。問題は相手にとって私がどれほどストレスになるかということかもしれない。お互いの違いがお互いにストレスにならない関係が、はたしてJAMSのスタッフとそしてアフガニスタンの人々と結べるかしら。「いい天気ね」と言うたびにふとそんなことを考

えているこの頃である。

## ペシヤワール訪問

千葉大学医学部学生

伊藤みりえ

### \*「邪魔してきた人」と中村先生

PIAにしては珍しく予定通りに到着し、空港に西岡さんとシャワリ先生の暖かい笑顔が迎えて下さいました。車内から見ると街はまぶしいぐらいに明るく、たまに遊牧民のテントがはられている街路も清潔でした。その日吉武先生に中村先生が「邪魔してきた人」と紹介して下さいました言葉通りの滞在でした。同じ短期滞在の西岡さんや宮本さんが毎日忙しくしているのに比して、申しわけないぐらいのんびりさせて頂きました。専門的なことができるわけでもなく、らい病棟で吉武先生のをとをチョコロチョコロとついでまわったり、藤田さんの手伝いをするとという名目で患者さんに遊んでもらっていたりして過ごしていました。

私が持っていたイメージと異なり、ジュザム(らい)だからといってそれほど暗



新しいらい病棟の前で患者さん達と

い感じはしませんでした。仕事も単調さとはほど遠く、入院されている方の治療、再建手術、リハビリから通院者の投薬管理、早期発見のためのサーベイランス(調査)など、こんなに沢山やることがあるのかと無知な私はびっくりしました。

### \*人間味あふれるらい病棟

治療に長い時間が必要なので、出会ったひとりひとりと長くおつき合いくていいなど、ふと思ったりもしました。もちろん



## 募 集

### JAMS 発

#### 「共に歩む」ワーカーを!!

JAMS では日本からのワーカーを募集しております。ただし、JAMS は出来上がった団体ではなく、熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々をの便をを図ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

#### ① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。
- ② 6か月以上の滞在者は、現地で1か月、ペルシャ語またはパシュトゥ語又はウルドゥ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。
- ④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をすゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区天神1丁目10-24  
福岡 YMCA 内ペシャワール会  
電話（毎水曜日夜7時～9時）  
092-731-2372  
Japan-Afghan Medical Service

遊びに行った私の感じ方は悪戦苦闘している藤田さんや吉武先生から見れば甘ちゃんなのでしよう。

患者さんは来る人は誰でも受け入れてくれるようでした。一般病棟と比べて、したたかで人間味があつておもしろいと言われなくなりました。長い入院生活のため気づまらなくなったり、けんかの場面にも出くわしました。年老いた兄弟が給食を一つの皿にまとめて一緒に食べているようなほほえましい光景にも何度も会いました。毎日いろいろなことがあつて楽しかったです。折にふれて患者さんの方が、新米のシスターに教えてくれたり、思いやつて下さいました。

### \*私もあんなドクターに

中村先生は信仰に近いぐらい絶大な信頼を集めていらつしゃいました。吉武先生もいろいろ苦労なさつていても、患者さんには明るく接して、頼られていて、私もあんな風になりたいとついで歩いていて思いました。でも、私が卒業後、数年の研修を経行つたとしたら、自分の知識、技術の未熟さに悩むと思います。らいについて専門的なことができない時に、例えば中村先生がご帰国なさつてしまい、病棟に放りだされたら、不安で不安でたまらないことでしょう。きっと自分ができないことを辛く感

じ、それが恐いなと思いました。

### \*懐かしい祈りの調べ

最初、よそよそしいぐらいにきちんとしていた街も、気がついた時には、ずっと長く住んでいるように感じていました。今、長く壮重なアッラー・アクバルで始まる毎日を懐かしく思います。「ペシャワールに一度来た人はもう一度来ることになる」とおっしゃつた中村先生のお言葉が実現することを願つてしまいます。

中村先生をはじめ、藤田さん、吉武先生、らい病棟、JAMSの皆様の御活躍を遠方より祈つています。

## スルンギイ弾き

ダン、ダン、ダダン……。

とげ草が散在する大地の起伏をぬって、右へ左へねじれた、村から街道へ出る細い路が伸び、ドール（大太鼓）を腰の前に吊った男がひとり、やってくる。

ダン。ひと打ちしてバチを持った手を下げ、挨拶を超越す。

「サラーム」

「サラーム」

印度亜大陸からアフガニスタン、イラン、伝統的な音楽家達の大半はさまよって歩く。街に家を構え、音楽だけで生活を維持している者は数える程しかない。

正統イスラムの教えは、人間の情の部分に訴える存在として音楽を積極的にはすめない。ただ、神秘主義の傾向をもつ一派では、イスラム讃歌の詠唱と演奏を行なう音楽家への尊敬をもっている場合もある。

一般に音楽家達は、人々の深い愛情に支えられておりながら、社会的な地位は低い。夕刻テレビでの芸能番組中で擦弦楽器スルンギイを演奏した男が、夜のカラチを流して歩くのについてまわったことがあるが、

街の人々がそのスルンギイ弾きに示した反応は、ただの流しの芸人に対するものだった。



文・画 甲斐大策

# 音楽家達

アフガニスタンの旅から

## 歌姫達

イスラム女性の音楽家の地位はもともと低く、多くが街の歌姫兼踊り子の生活を送る。

ごく少数の女性が、伝統音楽の名門出の血を誇って、社会的に認められるだけである。女性だけに限れば、声楽であれ器楽であれ、印度世界の方がはるかに高い地位を得ている。

カーブルに一軒あった小屋では、捌け口のない性欲を眼の中にまで赤くみなぎらせた男達が会場を埋め、歌姫達の歌に酔い、中には泣く者さえいた。

性的興奮も人間の大切な感情だから、歌姫達は偉大な存在には違いないのだが、彼女達は罪深い存在として生活は報われず、尊敬を受けることもない。

しかし音楽家が自作の詩を唱って人々の心をうつ時、彼は、時の為政者よりも大きく高い存在となる。最高の音楽家は、同時に最高の詩人であらねばならないのである。彼は、即興も混じえて、生命の限り人々に自らの詩作を問い、伝えようと努めるのである。

人々は、詩への絶対的な尊敬をもつから、評価は当然厳しく高度である。神業に近い演奏も耳をくすぐる美声も、心にしみとおる詩をとまなびてこそ人々に受け入れられる。

### 帝王サラハング

そして、そんな最高の音楽家は、常に人々の側にいなくてはならないのも当然のことである。

平和な時期のカーブルで、シャイダアは温厚な王のようだった。場末のホテルの結婚式で五時間、笑みを絶やさず唄い続けた彼を忘れられない。彼の歌は、布に包まれ介添えの娘達に支えられた花嫁を迎え、若者達は高々と手を取り合って輪をつくり、揺れながら踊っていた。そのシャイダアは自らがひき起こした交通事故で、アフガニスタンの今日の悲劇を見ずに世を去った。

サラハングは、さまよえる帝王だった。人々は彼をオスタード(師)と呼んだ。

招かれれば、どんな場末のチャイハナにでも出向き、胸に当てた右手を宙に伸ばし、また戻し、夜明けまで唄った。その詩と旋

律は、大地の起伏そのものだった。私の邪悪、おお、お前の邪悪、そうかお前もあそこから来た者か……その名は邪悪の地、その地の名は「我が邪悪」……彼の歌に人々は泣きながらうなずいていた。



カーブルへ無理に帰国、八〇年代の初めに死んだ。殺されたともいう。アマハング、焼殺。シエル・ガズナウイ、バスと共に焼殺。私の知人だった無名の楽師達の多くが、射殺され、拷問死した。

誰もが、人々の側で自らの詩を唱って死んでいった。先年、パキスタンの国境の古都、ペシャワールで会ったひとりのアフガニスタンの学生は、サラハングのカセット一巻だけが荷物だった。

「僕は身体が弱いし、戦いも恐ろしい。家族は皆死にました」

青ざめた顔のその青年は、同族である難民出身のカーベット屋のラジカセでそのテープをかけてもらいながら、いつまでも泣いていた。

サラハングは、国賓のように迎えられたデリーのコンサートで倒れ、私の街で死にたい、とソ連軍と政府軍に掌握されていた

(本文は1990年1月、「西日本新聞」掲載原稿に加筆したものです)

●事務局だより

\*吉武さんと藤田さんが元気に帰って来られました。中村先生は二人より一足先の帰国で、各地で報告会を精力的にこなしておられます。石松先生は二年の任期を終えられて現在岡山大学の医学部で研修中です。七月には二週間ほどカンボジアに行かれます。

本文の報告にもありますように、これまでに三十人ほどのボランティア・ワーカーが現地に行ったこととなります。そして長期のワーカーの希望者はさらに増えつつあります。アフガン問題がマスコミの紙面から消えるのとは逆に、私たちの活動や事業に人々の関心や支援が確実に寄せられつつあることを、心強く感じます。世間を見ると、難民問題を含む世界との関わりは、ともすればその場しのぎのチャリティショーやスタンドプレイに陥りやすいようですが、そのような流れとは無縁な処で、現地の実情に則した活動を持続していきたいものです。

\*中村先生の著書『ペシャワールにて』の増補版が近く刊行されます。初版本は好評のうちに二刷まで出しましたが、初版本刊行後世界は激動の時代に入りました。アフガン問題に限っても、ソビエト軍の撤

退・難民帰還問題・復興援助ラッシュ・湾岸戦争・国連／NGO引揚げの動きと、世界的な動きが続きました。「増補版」では、初版本の内容に加えて約五〇頁ほどの原稿が書き加えられましたが、単にその後の事実をフォローしたということではなく、中村医師がこの十年一貫して実践し主張してきたことが、湾岸戦争等をくぐることによってより鮮明に見えてきたと言えます。

ご講読をお願いいたします。

\*先にご案内いたしましたように、七月二十日(土)にはペシャワール会総会を兼ねた報告会があります。この時に各地からワーカー経験者が集まりますので、大座談会を計画しています。次号の会報には掲載したいと思しますので楽しみにお待ち下さい。暑さの折くれぐれもお体ご自愛下さい。

〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMCA内ペシャワール会宛でお願いします。(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-6559 ☎七六一七四〇)

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ  
中村哲著 四六判上製二六〇頁予価一五四五円

●増補版  
ペシャワールにて

― 癩(らい)としてアフガン難民

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治的不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしに人間と神に触れることができる。

(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ  
石風社

福岡市中央区大名1-2-15  
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の変更は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE (〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二一三七二) 内におく。